

第3部 実践者の立場から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28210

第3部 実践者の立場から

第 5 章 体験的太鼓論

木越 治（上智大学）

I 太鼓を始めるまで

1. 幼児期

才能の有無はともかくとして、子供のころから音楽が好きであったことは間違いない。

幼稚園に行く前のまだ 4、5 歳だった頃、ラジオで「歌のおばさん」という童謡番組を聞くのを楽しみにしていたのを覚えている。その頃、長姉——私の兄弟は現存 8 人であるが、一番上の姉は私とちょうど一回り違う——が花嫁修業のために習いに行っていた近所の裁縫教室に呼ばれ、「覚えた歌を歌ってごらん」と言われたので、次々にラジオで覚えた童謡を披露したことがあったらしい。それも、一度や二度ではなくしょっちゅうだったという。このことは私自身の記憶にはあまりないが、姉がおもしろがってうちの子どもたちによく話すので、なんなくそういうこともあったかなあ、と思い出す程度である。

そうはいつても、ピアノや他の楽器を習いに行かせるというような時代でも環境でもなかったから、小学校のときは音楽室にあったピアノやハーモニカをいじる程度であった。

2. 吹奏楽体験

中学生になって初めてクラブ活動というものがあることを知り、入学式で校歌を演奏していた姿にひかれて、その翌日、すぐにブラスバンドの部室に向かい、入部した。

当時のわが母校（入学時は河北郡森本町立森本中学校、卒業時は金沢市立）のブラスバンド部は悲惨な状態で、三年生が 10 名くらいいたものの、二年生は一人だけ（その人も、5 月にはやめていった）という状況であった。後年知ったことだが、我々が入部する前の年の終わりに顧問と部員が対立するというようなことがあって相当数の部員がやめていったということのようである。

だから、最初に入った私は、すぐに必要とされていた大太鼓の担当ということになり、それ以来、朝礼のときからには同級生の列には並ばず、ブラスバンドの一員として校歌や青少年赤十字の歌などを先輩の三年生に混じって演奏するようになったのである（結局、これが縁で、のちに和太鼓をはじめることになったわけである）。こうして大太鼓をたたっている私の姿を見た音楽担当の先生が、「まあ、あんた、ブラスに入ったの。よかったねえ」と声をかけてくださったのははっきりと覚えているから、音楽の先生にも、私が音楽好きであることはすぐに見抜けたものらしい。実際、音楽の時間はいつも楽しみにしており、授業で使うハーモニカで、家でもよくいろんな曲を吹いていたものである。

吹奏楽に関しての思い出は数多いが、いまは直接関係ないので省略する。ただし、入団した当時

悲惨な状態だったわが中学のブラスバンドも、三年生のときには上級生や顧問の先生などの尽力もあって、小編成の部で県のコンクールで優勝するくらいには上達していたことは書き留めておきたい。そして、ちょうどその頃、トレーナーとしてきていただいていた先生から、「君は、いまでもまあ石川県の中学生では一番上手な太鼓奏者であることを保証する」という御墨付をいただいた。そのうえで、「もし、もっと上手になりたいなら、これだけの練習メニューを毎日練習が終ったあとにやりなさい」と指示され、メトロノームを $\text{♩} = 80 \sim 160$ くらいの間で変化させながら、4 分音符から 16 分音符まで連続するリズムを正確かつ強弱に注意して 4 小節ずつくりかえすというとても単純な練習メニューをこなしていた。他に、ピアノシモとフォルティッシモで 10 分間ロール打ち（表彰式などのときに「ドラムロール」というあれである。トレモロともいうが、小太鼓の基本テクニックで、これをきれいにたたけるかどうかを聞けば、腕前のほどはだいたいわかる）を続ける、というのもあり、こういうまことに基礎的に練習メニューを夏の終わりから、秋のコンクールまでの数ヶ月間ずっと練習し続けたのである。上手になりたい一心の中学生だからやれたことだと思いつくと思う。しかし、そのおかげで、自分のリズム感に関してほぼ絶対的な自信が持てるようになり、和太鼓を始めてからも、細かいリズムを刻むことに関してほとんど苦労しないですんできている。やはり、基礎訓練というものは、大事だし、それをやる時期というものもあるのだと思わされる。

結局、吹奏楽は、中学・高校の計 6 年間（実際には、高校三年になると受験準備で引退していたから正味 5 年）続け、大学に入ってもオーケストラに 1 年間所属し、この間ずっと打楽器を担当していたから、基本的な打楽器の奏法はほぼ身につけたといっていいただろう。ただし、オーケストラになると——特に当時よくやったハイドンやベートーヴェンなどの古典派の作品だと——打楽器は添え物的になってあまり面白くなかったし、自分自身の興味が他に移ってしまったことなどいろいろな事情が重なって、結局、一年生の冬の定期演奏会に出た直後にオーケストラをやめてしまい、以後しばらく音楽をやることから離れてしまった。

Ⅱ 空白期

その後、大学院に進み、やがて大学に職を得て勤め始めた 20 代・30 代の時期は、レコードやラジオなどで音楽はよく聴いたが、自分で演奏する機会はほとんどなかった。ただ、最初の勤務先である富山大学を離れる 36 歳くらいの時に、吹奏楽部から誘われて定期演奏会に出してもらった機会があった。ひさしぶりに若い人たちといっしょに練習するのはとても楽しく、また、自分の腕前が、それなりに通用することを知って、少しだけ得意になったものである。

Ⅲ 太鼓をはじめる

1. 郷里に戻り、太鼓を始めるまで

勤務先が富山大学から金沢大学に移ったのは昭和 58 年 10 月のことであるが、一家全員が金沢に住むようになったのは翌 59 年の 4 月からである。このとき、自分の生まれた大場町に住まいを求めたことが、結果的に太鼓をはじめる大きなきっかけになったといえる。

ちょうど昭和から平成に移る時期、昭和天皇の体調不良のことが毎日ニュースとして報道されていた時期のことである。だから、昭和 63 年の秋くらいだったはずだが、たまたま娘の通っていた小学校の父兄会に行ったとき、中学・高校とずっといっしょに打楽器をやっていた一学年下の K Y 氏に声をかけられた。「いまちょうど、大場の太鼓に宝くじ協会の補助金がもらえることになって、楽器の数が増えるのだが、木越さんも入っていっしょにやってみませんか。」という誘いであった。彼は、東京の大学を卒業したあとすぐ郷里の大場に帰り、以後ずっと太鼓をやっており、その様子は祭りの時に見たことがあり、楽しそうだなと思っていた。他のことなら少しは考えたと思うが、他ならぬ氏の誘いであり、富山大の吹奏楽公演に出たことで、自分の中の音楽をやることへの情熱も再燃し始めていたときなので、ではやってみようか、ということで、その年の 10 月くらいから練習に参加したのであった。

例年、秋には、イベントも多いとのことであったが、昭和天皇の体調不良で軒並みそれらの予定行事が取りやめになり、半年くらいずっと練習だけしていたという印象がある。

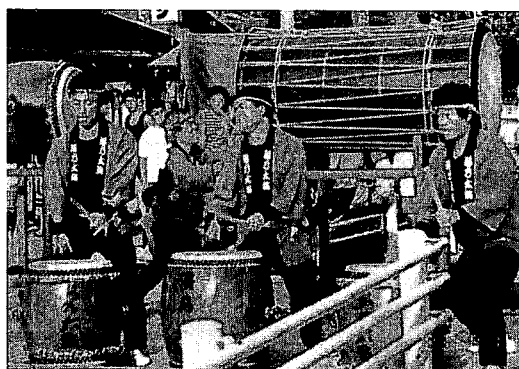
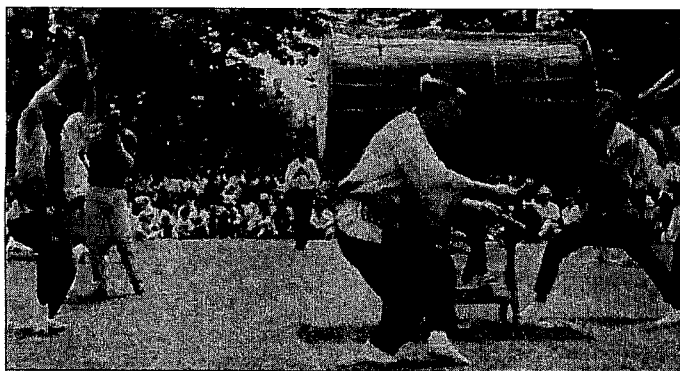


写真 1（左） 筆者が加入する昭和 63 年以前の大場潟乃太鼓の演奏の様子

写真 2（右） 筆者が加入した頃の大場潟乃太鼓

当時のメンバーには、代表の北西悦文氏（故人）以下、前述の K Y 氏および私と同年代の T N 氏、H M 氏、やや高齢の I S 氏、その他に、私と同じ時期に入った私よりは若い二人のメンバー（この二人は、その後仕事の都合などで離れていった）がいた。

この当時の潟乃太鼓のレパートリーは実質的に 1 曲といってよく、「まわり打ち」と称する三小

節の定型的なリズムを各人が大太鼓のまわりながら打っていき、ある段階になると、各個人のソロに移って、最後は全員で胴太鼓を揃えてたたいて打ち上がる、という形式である。いま考えると、個人技に依存する部分が多く、特にソロを取る人は、技術だけではなく、強烈な個性を発揮する必要がある。そういう点は、あとから加った人間にはなかなかむずかしいことであったが、なんとかリズムに付いていくことだけはできたので、一応メンバーのような顔をしていることができた。

2. 初舞台

初舞台は、年号のかわった翌年 3 月である。忘れもしない、いま金沢歌劇座になっている、当時は金沢市観光会館と呼ばれた 2000 人以上入る大きな会場である。「石川県民謡大会」という催しで、北西さんもその前の潟乃太鼓代表であった川重（故人）さんも、民謡歌手として活躍していた人だから、太鼓の団体ではあるが、石川県民謡協会の正式のメンバーになっていたのである。

ここで、半年の間ずっと練習してきた、まわり打ちから自由打ちというパターン、最後は皆で揃えて打ち上がる、という曲を演奏したのだが、私自身、途中でリズムを見失ってしまい、なにがどうなっているのかわからないまま、ばらばらで終わってしまうという全くひどい有様であった。ふだんの練習では、まあまあ揃えて叩くことができたので、たぶん大丈夫だろうとたかをくくっていたところがあったと、たしかに思う。まことに、舞台には魔物が住む、とはよく言ったものである。もっとも、これがいい薬になり、以後はかなりまじめに練習するようになり、その後も、小さなイベントへの出演機会が何度かあったが、このときほどみっともない間違いをすることはなかった。

以後、この大会には 10 年以上出場し続けたが、そのたびにこの初舞台の失敗のことが話題になったものである。もっとも、その後、後述するように、独自のオリジナル曲をレパートリーに加えるようになってからは、どんな民謡チームよりも喝采を浴びるようになったので、このときのリベンジは充分に果したとはいえるだろう。

3. 曲づくり——神馬 SANATAKE その他

そうやって、太鼓を始めてからの約 7、8 年間は、いま考えても、とても熱中していたし、かつ真剣であったと思う。

この時期に、一番影響を受けたのは「鼓童」のステージである。これは我々に限らず、日本中、いや、世界中の太鼓打ちがそうだったのではないかと思う。はじめて見たときは、完璧なテクニックと見事な舞台演出に圧倒されて、あんなふうにとたけるようになりたいと心から願い、CD をすべて買い込んで、カセットにダビングしてメンバーに配ったり、写真集を買って眺めたりしたものである。

ただし、彼らのように、佐渡の廃校にこもって合宿し、一日中、体力づくりと練習をするというようなことは、我々のように別に仕事を持ちながら趣味でやっている人間には無理である。だから、「鼓童」に関しては、ひとつの理想形として、学ぶべきところは学ぶとしても、我々は我々のやり

方を考えるしかない。この点に関しては、我がチームの音楽監督であるKY氏がいつも口にして「よその真似をしてはならない。我々にしかできないオリジナリティはなにかを考えよう」という言葉は、どの分野においても、常に肝に銘じておくべき大切な真理であるだろう。

というわけで、なんとか太鼓に慣れて、一通りたたけるようになった頃から、オリジナル曲を作ることにもつぱら関心が向くようになった。

初めて作った曲は、「連鼓烈響」という名前である（実は、ごく最近作った曲にこの名前をつけてあるが、これは記念の意味でつけたもので、中味は全く別のものである）。全員がアイディアを出し合って作ったものだが、1、2回、小さなイベントに出たときに演奏した程度で、すぐにお蔵入りになってしまった。まあ、その程度の出来で、この当時の楽譜はもう残っていないはずである。

そのあとに、「大場めでた祝い太鼓」という曲を作った。これは、最近あまりやらなくなったが、ひところは、大切なレパートリーとしてよく演奏した曲である。

作ったきっかけは、大場に伝わる「大場めでた」というめずらしい民謡を知ったことにある。NHKで放映されていた「お達者クラブ」という番組に大場町のお年寄りがたくさん出演し、昔の田圃仕事を再現しつつ「大場坊主」という明治大正にかけてよく栽培された稲の品種——大場出身の西川長右衛門という人が発見し育てた品種で、いまも町の入り口にこの人の大きな碑が建っている——を再生させる番組が放送されたことがあった。そのなかで、大先輩の川重さんが、大場に伝わるめずらしい民謡だといって「大場めでた」という唄を披露したのである。これがなかなかユニークな民謡だったので、これを生かした太鼓の曲ができないか、いろいろと工夫して作り上げたものである。

最初にこの曲を全員で歌い、そのあと、チャップが入り、鉦が重なり、締太鼓が入ってから、それらを伴奏に、2小節の基本リズムをくりかえしながら、胴太鼓から桶太鼓にうつり、対照的な二人のソロを入れつつ、最後は大きく盛り上がり終わるというもので、むずかしくはないが変化に富んだなかなかいい曲にまとまった。

初めて演奏したのは平成3年の2月、野々市文化会館フォルテで行なわれた「第二回石川の太鼓」であるが、これ以後、いろんなイベントに行っても、核になる曲ができたという感じで、ずいぶんとやりやすくなった。

もともと、簡単とはいっても、一箇所気をつけないといけないところがある。ソロが終った直後、全員がピアノシモからフォルテシモまでクレッシェンドしつつ2小節×8の基本リズムをたたきつつ、大きくなったところで、全員ぴたっと休み、そこにチャップが一人だけ入ってくるという、強弱と楽器の音色の対比を強調した箇所がある。ところが、最初の頃は、ここのブレイクのところで、しょっちゅう飛び出す人がいた。最後に全員が一体になって盛り上がり終るところでも残ってしまうことがあって、こういう全員いっしょのところでの失敗はものすごく目立つ。練習の時はなんとかできるのだが、本番では本当にしょっちゅう間違えるので、とうとう、自分から退団していっ

た。人間的にはとてもいい人で、いささか気の毒な気もしたが、決められたオリジナル曲を演奏するようになると、やはり、きちんと合せることができないと、なかなかメンバーに加えられないことになる。潟乃太鼓というチームは、大場を拠点としているが、この町はわずか 1000 世帯程度の町であるから、ここの人間だけでこのチームを維持していくのは不可能である。だから、他の町内の人でも希望すればいつでも参加できるし、経験者であることを条件としているわけではないから、当初はいろんな人が入ってきたが、だんだんと活動の幅が広がり、やる曲もむずかしくなってくると、こういうふうに、ついていけずに、退団せざるを得なくなる人も出てくるのである。

この他にも、センスもよく、技術的にも申し分ないが、仕事の都合でどうしても続けられない、ということでやめていった人もたくさんいる。その意味では、太鼓を続けるのは、意志だけではなく、仕事や家庭などの諸条件なども大きく関与してくると思う。

もうひとつ、この曲を近年はあまり演奏しなくなったと書いたが、ソロを担当する二人ができるだけ対照的であることが望ましいからで、北西さんが元気なときは、彼がまず、そのキャラクターを生かしておもしろおかしく演じ（太鼓はほんの少ししかたたかず、床をたたいたり、観客に声をかけたりするパフォーマンスの方が主になる）、そのあとにKY氏（でも私でもその他の人でも、とりあえず、まともにソロワークができればOK）がやると、構成的な模変化がありおもしろいのだが、北西さん亡き後は、そのあとを埋める人がおらず、曲自体はそんなにむずかしくはないので、だんだんとやらなくなったのである。

このあとに作ったのが、潟乃太鼓の代表曲「神馬 SANATAKE」である。

これを作ったときのことは割合にはっきり覚えているが、たぶん、1991 年の秋から冬にかけてのことであつたと思うが、KY氏が身内の不幸のためにしばらく練習も本番出演も自粛していたことがあつた。この時期に、残りのメンバーで、次の新曲を作ろうといろいろ考えて、このときに、いま、締太鼓がおわったあとに胴太鼓がたたくフレーズの基本部分を作ったはずである（もちろん、この曲も他の曲同様、しょっちゅう手を加えており、リズムの基本部分は大きく動かないにしても、使う楽器や奏法などは、初演当時から見るとかなりかわっているのであるが）。2 拍 3 連などを取り入れたという点が、当時としてはちょっと珍しかったのではないかと思う。そのあと、練習に参加するようになった北村氏に、手直しを求めつつ、「このフレーズの前に、締太鼓のかなり細かい手のソロをつけるといいと思うが、どうだろうか」と相談したところ、「よし、では作ってみる」ということで、次の練習日の時に、ほぼいまやっているのに近い締太鼓のソロの部分楽譜を書いて持ってきたのである。この部分は、かなりドラム的なテクニックを駆使したもので、やりはじめて 10 年くらいは、私と北村氏しか叩けないむずかしいフレーズということになっていた。が、その後、子どもたちに教えるようにしたら、数年で呑み込んでしまったし、それ以後、若手のメンバーも挑戦したたけるようになってきている。そういう様子を見ていると、我がチームの基本テクニックの向上は目覚ましいものがあると思わざるをえない。

ともかく、こうした素材をまとめ上げて1曲にし、1992年2月に小松であった「第3回石川の太鼓」で初めて披露したわけである。曲名は、ちょうどこの頃、大場の佐那武神社に神馬の銅像が寄贈されるということがあったので、それにちなんでつけた。佐那武というのをローマ字表記にしたのは私のアイディアである。

この初演のときの演奏は、かなり満足のいくできばえで、大会が終ったあと、大場に戻ってから、演奏のビデオを何度も見直して、全員で大いに盛り上がったのをよく覚えている。



写真3 初期の「神馬 SANATAKE」演奏時の配置

「大場めでた祝い太鼓」と「神馬 SANATAKE」の2曲ができてからは、いろいろなイベントでも、構成が非常に楽になった。だいたいにおいて、こういうときに求められる演奏時間は10分から20分くらいのものであるから、それぞれ7、8分で演奏できるのでとても具合がいいのである。また、曲の合間の太鼓等を移動する時によくつなぎでしゃべる機会があったが、時には、「馬というのは、昔から神様の乗物とされていました。それでよく神社に奉納されるのです。いまでも引き出物という言葉がありますが、これは本来は、馬を奉納したときに使ったものです。やがてほんものは大変なので、絵馬とか銅像とかになっていくのです」というような蘊蓄を披露することもあった。

そして、この頃から、対外的にも私たちのチームの力が認められるようになり、海外で演奏する機会が得られるようになっていくのである。

4. イスラエルへの遠征

海外で演奏した最初の経験は、1993年6月に「まつり in ハワイ」という行事に参加したときである。このときは、金沢市からの派遣であったが、パレードの一行のなかに加わってたただけなので、それほど本格的に演奏したという感じはない。

本格的な海外での演奏として、いまでも忘れられない体験は、1994 年秋のイスラエルである。

これは、日本太鼓連盟が、国際交流基金から予算を得て派遣する事業として行なわれたもので、それに我々が選ばれたのである。日本太鼓連盟の事務局長や専務理事も参加しての大きな行事であった。

イスラエル博物館で開催される浮世絵展のオープニングで演奏してくれというのが向こうからの要請であり、その中味はというと、開会式直後に 20 分の演奏、そのあとレセプションで 50 分、さらに日と場所を改めて、1 時間くらいの演奏会を開く、というものであった。

実際に太鼓をやっている人に確かめてもらえばすぐにわかるはずだが、1 時間の演奏会を維持できるレパートリーを持つチームはそうざらにはない。クラシックやポップスと違い、太鼓は基本的にオリジナル曲が主体で構成されるし、体力的なことを考えても、1 時間というのは相当に大変なことである。

そういう、舞台構成の問題の他に、数多くある太鼓（我々のチームは太鼓の数が多いので、すべての機材をまとめると 500 キログラム以上になった。このときだけは、ほぼ太鼓一台ですむ御陣乗太鼓をとてもうらやましいと思った）をどのようにして運ぶかの手配も大問題である。また、個々の参加者の予定の調整——出入りを入れて 10 日近くあった——などいろいろ大変なことが多かったが、メンバーの勢いと、北西さんの「まあ、やりはじめればなんとかなるさ」という楽観主義で実現できたツアーであった。いずれにしても、1 時間近くの演奏会を 2 回やるようにというのは我々の経験したことがないものだったため、構成を考えるだけでも大変で、手持ちの曲をいろいろにアレンジしなおしたりして工夫したが、どうしてももう 1 曲分くらい必要だ、ということで、急遽、KY 氏が一人で作曲してきたのが、いま我々のメインレパートリーになっている「三反田^{さんだた}」である。

曲の原型は夏休みの終わりくらいにできたが、それをあれこれ手直ししながら 10 月末くらいまでになんとか仕上げた。この曲を正味 2 ヶ月くらいでなんとかものにしたというのは、相当に真剣になっていないとできないことであろう。当時、私の家では犬を飼っていたが、その散歩のときにいつも楽譜を持って行き、田圃のまん中で懸命に暗譜したことを思い出す。

太鼓の配置は、まん中に大太鼓、左脇に英哲型太鼓、右脇には斜めに置いた胴太鼓、というもの。曲も、この三者が、それぞれにソロを取ったりしながら絡み合いつつ進んでいくという構成で、技術的にも体力的にもかなり高度なものが要求される曲である。この当時の KY 氏にとって持てる限りのフレーズパターンを持ち込んで作った曲であったと思う。「三反田」というのは大場にあるお米のたくさん取れる田圃^{あざめい}の字名であるが、3 パートに別れる曲であることから曲名に借用したものである。

なお、この頃までに、女性 2 人が新しく参加しており（ともに未経験者であったがとても熱心で、一時は活動の中心になっていた。が、そのうちの一人は、もうこの世にはいない！）、前から KY 氏が指導していた金沢市大野町「山王雅太鼓」のメンバーであった KK 嬢も特別にこの旅行に参加した。その後、彼女は、こちらのメンバーになってしまったので「山王雅太鼓」からは、大事なメ

ンバーを引き抜いたと恨まれることになったが、「山王雅太鼓」の他のメンバーとは技術的にも意気込みにおいても全く違っていたから、遅かれ早かれ、彼女はよりレベルの高いチームに移っていたはずである。

結局、このツアーの参加者は、我がチームからは、北西悦文氏以下、計 11 名この他に、(株)浅野太鼓社長、日本太鼓連盟から事務局長と専務理事、それに旅行中つききりで世話をしてくださった日通旅行のツアーコンダクターの方をあわせ総勢 15 名であった。

このときのことは、くわしい旅行記を作ったので、それを読めばいろいろとこまごましたことが思い出されなつかしいが、ここでは演奏のことにのみ限定する。

開会式直後の我々の演奏は、日本の太鼓をはじめて聞く人ばかりであったせいもあり、かなりのインパクトで受け取られたらしく、終了後は大歓声に包まれた。休憩時間に取材に来た読売新聞の特派員から、「日本文化というとお茶とかお花など静かなものが主なので、こういう元気溢れるのもあるということを知ってもらえるのは、我々としてもうれしい」というようなことを言われたのがとても印象に残っている。

しかし、そのあとの約 50 分の演奏は、正直に言ってあまりいいとは言えなかった。直前に日本文化紹介ということで、お茶のお手前披露をやっていたが、その伴奏にお経が流れていたりして、はなはだ意気が揚がらない雰囲気ではじめなければならなかった、というような事情もあって、なかなか気分が乗らず、ずいぶんと出来の悪い演奏になってしまったからである。それでも、終了後、いっしょに太鼓をたたきませんかと誘ったら、たくさんの人が舞台上上がってきたので、30 分くらい相手をしていた。

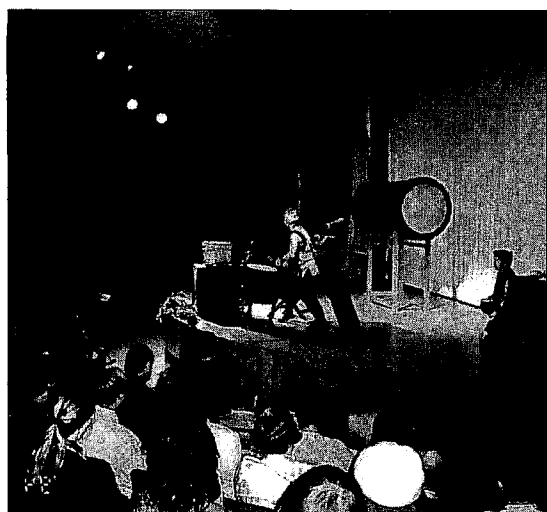


写真4 イスラエルでの演奏



写真5 演奏後に観客とともに

このあともメンバーの言動が物議をかもしたりするなどのトラブルが続いたが、まる一日、死海などを観光させてもらったあと、テルアビブに移って行なったラマツガンというところでの演奏会は、前にうまくいかなかった点を反省しつつ、きびしくリハーサルをやったおかげで、我々としてはもっともよくできたステージになった。司会を、同行した専務理事（現日本太鼓連盟理事長）が買って出てください、流暢な英語を駆使して盛り上げていただいたことも成功の重要な要因であったと思われる。このときにはじめて試みた演出であるが、前半が終了後、いったん会場の照明を落として真っ暗にしてから、そのなかで、北西さんが民謡（このときは「佐渡おけさ」）を歌い、そのあとに、オリジナルの笛をイントロに入れてから「三反田」を演奏したが、これは非常に効果的であった。

あとで届けてもらった現地の新聞にも、かなり好意的な評が載っていた。

「終りよければすべてよし」で、ここに至るまでいろいろ問題はあったが、こうして、なんとか満足して帰ることができたのである。

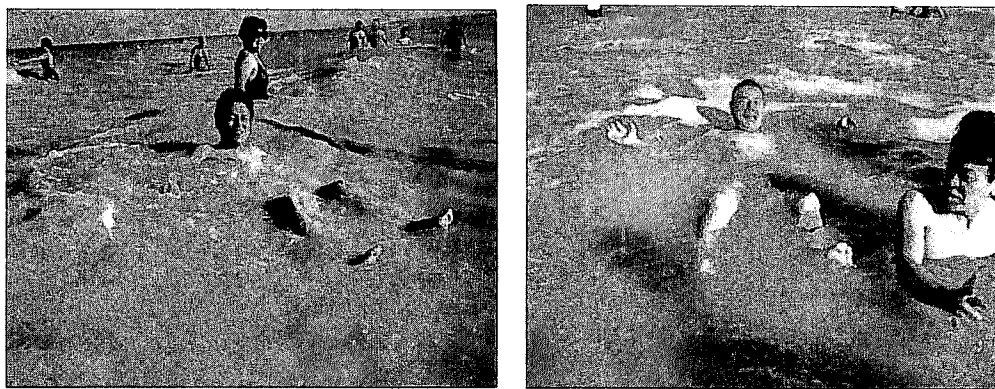


写真6 死海にて（イスラエル公演を終えたのち）

このツアーで、1時間のステージを自分たちだけで維持できたというのは、以後の私たちを支える大きな力になっていることは間違いない。ふだんの演奏活動で求められるのは、長くて20分くらいであるから、レパートリーとして2〜3曲持っていればたいていの場合に対処できる。しかし、同じ曲ばかりやっていると飽きてくるので、ときどきはやる曲をかえる必要があるし、担当する役割を変えたりする必要がある。そういう意味でも、アマチュアチームにしては、豊富なレパートリーを持っているチームだといえるのではないかと思う。

2009年に、「潟乃太鼓60周年記念」と銘打って、我々としてははじめての単独コンサートを開催したが、構成的なことはこのときの経験があったので、ほとんど心配しなかった。実質、1時半くらいであったが、2時間でも十分に維持できたと思う。

5. 以後

この頃が、私自身としては、プレイヤーとしてのピークにあった時期であると思う。

この頃、大場町の広場で、夏に、「やるまいか！太鼓」というイベントを企画した。あいにくなことこの年は冷夏の年であり、8月17日であったが、当日は朝から雨が降って大変な思いをした。観客はそれなりに集まったが……。



写真7 雨のなか行われた「やるまいか！太鼓」

このときのリベンジの意味をこめて、公民館の役員として、同種の企画を2000年以後何度か企画し、こちらのほうはどれも天気に恵まれてうまくいった！）、小松であった太鼓コンクールに出場したり（予選を一位で通過したものの、本選では三位であった）、秋田県横手市であった「全日本太鼓フェスティバル」や翌年の「陸前高田太鼓フェスティバル」に参加したりもした。特に、陸前高田太鼓フェスティバルでの演奏ビデオは、NHKで放映されたものなので、質的にもすぐれており、時折、人に見せることがある。このなかで、私がたたいている最中にバチがおれてしまったシーンが写っているが、私は、特にあわた様子もなく、折れたバチで適当につなぎつつ、うしろのメンバーが手渡しで送ってくれたバチにすぐに持ち替



写真8 「陸前高田太鼓フェスティバル」にて

えて演奏する、というふうにやっている。前でたたいている私のバチが折れたことは、うしろにいるメンバーにわかったはずだから、絶対にそのためのリアクションはしてくれると信じていることができたのでできたことである。本当は、予備のバチを別に一本用意しておくべきなのだろうが、後ろを一度も向かないまま平然と新しいバチを受け取っている姿を見ると、メンバーとはしっかりと信頼関係で結ばれていたということを改めて痛感するのである。

そういう矢先の 1996 年 7 月に、北西氏が急死したのは、我々にとって痛恨の出来事であった。なによりも、私が参加した頃から、チームの技術的・音楽的な方面は我々にすべて任せてくれ、自分は求められるときに太鼓をたたく以外は、対外的な交渉などに専念していたという姿勢が本当にありがたかった。対外的なこと（石川県太鼓連盟関係のこと）に関しても熱心だったし、発言力もあったので、我々はあとについていけばよく、とても楽であった。上記に挙げたような大きな大会への出場は、すべて北西さんの采配によるものである。結局、北西さん亡きあと、その種の運営上の雑事を私や K Y 氏が引き継ぐことになったが、それはかなり大変な仕事であると同時に、太鼓をたたくほど楽しいことでもなかった……。

6. 子供太鼓など

その後、1997 年秋から、子どもたちを集めて指導しはじめた。ただ、その直後大きな病気（腎臓癌の摘出手術）をしたこともあって、もう、この時期のように、必死にやるということとはなくなり、むしろ指導にまわることの方が多くなった。子供を指導すること等に関しては、次節であらためてくわしく書くことにする。

以後も、ヨーロッパやオーストラリアなどの大きな舞台で演奏する機会はあったが、私のなかでは、やはりイスラエル公演にまさるものはない。とてもきついツアーであったが、それだけに印象は強烈なのである。



写真 9 台湾にて；右端が筆者（2008 年）

Ⅲ 体験的太鼓論

以上のような体験を踏まえたうえで、太鼓に対する私自身の考えを以下にまとめておこう。

1. 太鼓音楽は楽譜で表現できるか？

太鼓をはじめたときから、私は積極的に楽譜（もちろん、リズムだけからなるものである）

を利用し、他の人にも提供するようにこころがけた。それが私にとっていちばん便利かつ簡単なコミュニケーションの方法だったからであり、私のように吹奏楽（に限らず洋楽全般）の経験があると、それはごく普通の方法だと思うが、しかし、太鼓の世界では、必ずしもそうではないようで、楽譜が苦手な人はたくさんいるし、微妙なニュアンスは楽譜では表せないと言主張する人も多い。

私は、楽譜が読める読めないということと、太鼓の上手下手とは別だと思っているし、また、楽譜ですべてが表現できるとも思っていない。しかし、それでもなお、意思疎通の道具として楽譜はあった方がいいし、読める方が絶対に楽だと思う。

以前、能登の太鼓の人が、太鼓ワークショップで、未経験の人たちに教えているのを見たことがあるが、このときは、楽譜というものを全く使わずに教えていた。初心者たたき方を教えるような段階ならば、楽譜は不要であるが、そこから少し進んで、参加者全員で数小節の短いフレーズのリズムを揃えてたたく、というような段階になると、口伝えでリズムを教えるよりは、楽譜に書いて示す方が絶対に楽なのになあ、と思われたことである。戦後の音楽教育は、その程度の読譜能力は誰でも身につけられるようにしていると思っているのだが、そうではないのだろうか？

また、作曲の場合、最初に曲のイメージを提示するには、楽譜によるしかないと思う。だから、創作を主体にするチームは、だいたい楽譜を用いているはずである。

ただ、加賀や能登に伝わる伝統的な太鼓のリズムを楽譜に起こし、それによってそのリズムをたたいてみても、なかなかもとの太鼓の感じを出すことはできない。また、リズムだけを真似してもたいしておもしろいわけではない。御陣乗太鼓のビデオを見て、そのリズムだけを楽譜におこしてやった場合を想定すればすぐわかるはずで、それだけではおもしろくもなんともないのである。

中学生の頃、大場の祭りで笛の伴奏の太鼓をたたいたことがあるが、大人の人から、そんな正確にたたくな、もう少しいい加減にしないと祭りの太鼓らしくない、と言われ、正確にたたいてはいけないということがよくわからなかったのを思い出すが、このあたりに、楽譜によることの限界があるといえよう。要するに、楽譜では表せない、微妙な間の取り方とか、ニュアンスや方言のようなもの、あるいは個人個人のクセみたいなものが、こういう伝統的なスタイルでは重要な要素になっているわけで、そこに、伝統的な太鼓の本質的な部分が存在しているといえそうである。

2. 太鼓は、音楽であると同時に、芸能的な要素も持っている。

前項と関係するが、当初、私が、楽譜をよく使用したのは、芸能的な要素よりも、音楽的なことを追求したいと考えたからである。別の言い方をすれば、それまでのメンバーがよくやっていた太鼓のまわりを踊りながらたたくようなことを自分はあまり上手にできないという意識があったの

で、おのずからそういう方向になったものである。もっとも、その方面を本当に追求するとすれば、技術的にも、演出等においても多くのことを要求されるはずで、それはアマチュアでは限界があるように思う。また、単に複雑なリズムをたたくことだけを求め、音楽的に純化していこうとした場合、Jazz やラテンなどの打楽器群には及ばないのは目に見えており、そういうのは、太鼓として自殺行為になりかねないと思う。

だから、イスラエル公演のときの練習中などに、浅野社長などから、もう少し泥臭い演出をした方がいい、というアドバイスを何度も受けたとき、その頃は、その意味がよくわからなかったのであるが、いまはとてもよくわかる気がするのである。

近年、私自身は、能登などの伝統的な太鼓の奏法に関心が向いているが——特に楽譜ではあらわせない方言のような部分がおもしろいと思う——、それも、こうした点とかかわりがあるだろう。いずれにしても、芸能的な側面は太鼓の大切な要素として、これからも大切にしていける必要があると思う。

3. とはいえ、基本的な打法は身につけるべきである。

太鼓を初めて数年ほど、能登の太鼓を見ながら、ずっと同じことしかやっていないのに、どうして我々の変化に富んだ演奏よりもインパクトがあるのだろう、としきりに思った時期がある。

その結果たどりついた結論は、出てくる音が問題だ、ということに尽きる。きちんとした打法理解に基づいて、よい音が出ていないと、やはりどんなにテクニカルなことをやっていても見ていてつまらないのである。

金沢周辺の新しいチームは、それぞれのチーム固有のオリジナル曲をもっているが、チームによっては、新しいことやむずかしいことをやりたがるために、「太鼓の出す音」というものにあまり注意を払わない例をときどき見かける。かつての我々にもそういう傾向があったと思うが、やはり、どういう音が太鼓としていい音であるかを知っており、きちんと出せること、どんなに細かい楽譜をやっているときにも、気持ちよく全身にひびきわたる音をつねにちゃんと出せる、ということは基本的な打法テクニックであり、メンバー全員が身につけておかねばならない基本的なことであると思う。これは口でいうほど簡単ではないが、吹奏楽などのように、教則本にできるように確立していかなければならない点である。

4. 合せてたたくことは簡単ではない

打楽器というのは、たたけば音が出るから、簡単な楽器だと思っている人が多い。ときどき太鼓講座などでたたいてみませんかといって誘うと、結構たくさんの人が、ではたたいてみようかといって出てくる。しかし、本当に合せてたたこうとすると、かなり鋭敏なリズム感覚が要求される。四分音符を4つ、10人の人間でそろえてたたく場合、リズム自体は簡単であるが、「そろえる」という感覚がわからないと、単にたたいているだけ、というふうにしかならない。ほんのわずか、10

人のうちの一人でも狂うととても気持ちが悪い、という感覚を共有できないと、四分音符を4つという単純なリズムが音楽にはならないのである。

しかも、本番では指揮者がいるわけではないので、最初に全員で入るときとか、休んだあとに出るときなどは、全員で呼吸をあわせてやらないといけない。その呼吸が、だいたい合っているという程度ではつまらないので、寸分の狂いもない、まるで一人でたたいているようにしか聞えない、というのが理想である。

太鼓を聞く場合も、リズムの縦の線がどの程度揃っているかに注意して聞けば、ほぼそのチームのテクニックのレベルを把握できるはずである。

私にとって、太鼓をたたく快感は、一人で華麗なソロワークをやるよりも、10人くらいで、出入りの音をぴったり揃えたり、16分音符の交じる複雑なリズムを二人以上でたたいてもほとんど狂いがない、というようなところに存在している。

5. 姿勢も重要な要素である。

当初から、リズムに関してあまり注文を出されたことはないが、その分、姿勢については、しょっちゅう注意され、いまでも相当厳しく注意される。自分でもビデオに写したりして、それなりに工夫しているつもりであるが、この点に関しては、まだそんなに自信があるとはいえない。

特に、まじめに練習を続けているときはいいが、しばらくサボったりしたときは、靦面に姿勢の乱れとなって出るようである。

よい姿勢でたたくと、それだけで30～40%くらい上手に見えるものである。

また、強弱についても、音だけでなく、体自体で示すように、ということは口うるさいくらいに言われた。小さくするときには、体全体をちぢこまらせるくらいに、大きくするときには逆にとびあがるくらいにはげしく、というように演奏するよう心がけると、見た目との効果で、とても上手に見えるものなのである。

そのせいかどうか、クラシックの人などが、あまり姿勢や表情を変えずに演奏しているのを見ると、もうちょっとどうかした方がいいのではないか、と思うようになった。また、本職の教師業においても、太鼓をはじめる前よりは、いろんな動作が大きくなってきているのではないかと思う。

6. コンクールのこと、指導のこと

次に、コンクールの功罪と、指導することについて。

ちょうど今年もジュニア太鼓コンクールの季節になった。1チーム15人までの高校生以下のチーム、という条件でこの大会が始まったのが1998年のこと（全国大会は翌1999年3月に開催された）であるが、毎年、この大会の予選が、石川県太鼓連盟の行事の中では一番盛り上がる。勝ったチームはうれし泣き、負けたチームも悔し泣き、という光景は毎年の定番である。

私も、第一回から自分のところのジュニアチームを指導し、参加しているので、その楽しみとつ

らさとはある程度わかっているつもりであるが、こういうコンクールの利点とはどういうところにあるのだろうか？

一般的には、後継者養成ということを第一に挙げるが、私は、コンクールが後継者育成ということに直接つながるかどうかについては、ちょっと疑問に思っている。というのは、コンクールのために熱心にやればやるほど、それだけが自己目的化してしまい、その時期がすむと、もう見向きもなくなる、ということがあるように思うからである。もっとも、これは太鼓に限らず、スポーツでも他の音楽（吹奏楽等）や芸能（民謡など）についてもいえることかもしれないが……。

もちろん、そうはいっても、技術的な面での進歩ということにおいて、コンクールの果たした役割というのはとても大きなものがあることは間違いない。

最初に出場したときは、とにかくどんなものか出てみよう、というようなつもりで子どもたちを連れて出たのだが、全くまぐれみたいな感じで入賞（5位）できた。それで、この分なら5年くらい頑張れば石川県代表になることも可能かなと思い、以後、それを目標に練習してきたが、年々全体の技術レベルが上がっていき、結局、わがチームが石川県代表になるには9年の時間を要した。

何度か全国大会も見たが、いまやなまなかなことでは、優勝はおぼつかない、という感じで、よほどしっかりした作戦を立て、一丸となって取り組まないと成績は残せない感じである。

また、いつもいい成績をあげているチームの指導者は、体育会系スピリットを持った人が多いように思う。技術的なことは他から学ぶことが可能だろうが、参加する子どもたちをその気にさせるというのは、彼らの精神までコントロールする力がないと駄目なようで、そういうことに基本的に疑問を持つ私のような人間は、どうもコンクールとは相性がよくないように思う。



写真 10 大場潟乃太鼓若鮎（子供チーム）の優勝（2007 年）

ただし、子どもたちを教えているということは、チームが地域で活動しいていくうえでは、とても大切な要因になると思う。

ちょっと横道にそれるが、地域——わたくしの場合は、生まれ故郷であるが——で暮らすということに関して、実は、私には忘れられない記憶があるので、書いておく。

大場に移ってきてすぐの年——もちろん、まだ太鼓をはじめていなかったときである——、運動会のあった日に、家内と子どもたちで能登の方にドライブに行ったことがあった。運動会のことは知っていたが、まだ顔なじみも少なく、出ていきにくい気がして参加する気になれなかったのである。そうして、夕方帰ってくると、「木越さんとこは、大学の先生だから、大場の運動会なんか、バカらしくて出られないので、どこかへドライブに行っていたのよね」と言いふらしている人がいることを近所の人に教えられた。家内は必死にそうでないと打ち消してまわっていたが、これは私にとっては、とても強烈なパンチであった。

知らない人が集まっている都会でなら問題なく許されることでも、顔見知りの多いこの町では、逆に気をつけなくてはいけないのだな、と心から肝に銘じたのである。

そんなことがあったので、公民館の役員を頼まれたときは一も二もなく引き受け、運動会・文化祭やお祭りなどには、都合がつく限り参加するようにしたし、太鼓をやるようになってからは、よけいにそのへんのことを考えるようになった。

まだ、北西さんがリーダーだった頃、大場町の運動会の日に出番があり、トラックに積み込んでいたら、世話係の人が来て「今日の運動会には出ないの？」とちょっとあきれたような顔で言われたことがあった。私は、以前にそういう経験があったから、まずかったな、前の日のうちに荷物を積んでおけばよかったな、と思ったが、北西さんは「関係ない」と問題にしなかった。しかし、これはやはりまずいので、太鼓をやっていくうえで、町内というか近隣との関係をどううまく作っていくかは大きな問題なのである。太鼓は練習でも大きな音が出るもので、町内の人がみな太鼓のことを快く思っているわけではない、ということはいくど心得ておく必要がある。

子どもたちに教える前は、我々の練習に対して、かなり頻繁に、太鼓の音がうるさい、とか、遅くまでやり過ぎる、とかいう苦情が来たものである。それに対しては、終了時間を早めるとか、一時は、森本の山中にある廃校を練習場にするなどとも検討したもののだが、いまになってみると、子どもにも教えています、というのが町内の人に対しては、一番効果的だったように思われる。もちろん、その結果として、太鼓を通して、町内行事に積極的にかかわることも大切な要素になる。いまは、町内の神社で12月31日の夜中（実質的には1月1日）に初打ちをするのが恒例になっているし、数年前からは、「虫送り」の行事を復活させ、7月末の土曜日に行なっている。その他にも、夏祭りのあとや盆踊り、運動会などに、声がかかればできるだけ優先的に出るようにしている。私自身は、結局、20年くらい公民館の委員を続けたが、そういう活動を通してできる人脈も大切なものであると思う。

これからのことはわからないが、現在の状況からみれば、太鼓というのは、おおむね、アマチュアとして、地域に根差したかたちで続けていくのが基本になるだろう。とすると、特に20代、30代というのは、仕事のこともあるし、結婚や転勤というようなこともあるから、なかなかひとつのところでそのまま続けていくというのはできにくい。だから、若い人だけのチームというのは作り

にくいし、長続きしないと思われる。年齢が入り交じったかたちでのチーム構成というのが長続きするコツであろう。

現在、潟乃太鼓には、メインの本体チームの他に、子供チーム（＝若鮎会、いまはメンバーが総入れ替えになったので、再建途中にある）、お母さんチーム（＝緋鮎太鼓）、シニアチーム（本末太鼓、昨年作ったばかり）などがある。これらが有機的に活動していくと、老若男女とりまぜたいろいろな人がいて、おもしろい集団になると思う。

7. 太鼓が一番！

仕事の都合でこの4月から東京に住むようになったので、いまは太鼓の活動に関してはほぼ引退している状態になっているが、それでも、なにかやれないかなと思って、一度だけ、住まいの近くの集会所でやっている吹奏楽アンサンブルの練習を見に行ったことがある。我々の頃からすれば、ずいぶんとこみいった曲をやっている感じで、楽譜には *Waltz* と書いてあるのに、2拍子と3拍子が交互に混じっていたり（でもメロディを聴いているとたしかに込み入ったワルツなのである）、5/4、7/4 といった変拍子も普通に取り入れられている。だから、最初は少し面食らったが、しばらく、楽譜を貸してもらい、メロディを聴きながらやってみると、まあなんとかたたけそうな感じではあった。

ただ、その帰り道、でも、結局、吹奏楽中での打楽器は、メロディ楽器の伴奏にまわっているんだよな、ということが改めて理解でき、やはり打楽器奏者としては、自分たちが前面に出ることのできる太鼓の方が楽しいし、やりがいがあるな、と思わざるをえなかった。

林英哲氏の講演に行ったとき、オーストラリアのメルボルン交響楽団の打楽器奏者に和太鼓を教えたところ、やがて彼は、オーケストラをやめて、自分で太鼓チームを作り、国内でツアーをやっている、という話を聞いたことがある。

また、国立劇場の歌舞伎教室で、大太鼓で雪の降る音を出す人が、とてもつまらなそうな顔をしてやっているのを見て、伴奏ばかりというのは専門家でも楽しくないのだろうなあ、と同情したことがある。

もちろん、時には主役になるときもあるのだろうが、ふだんはほとんど全体の音の下支えというような役回りで、楽器を演奏することだけに特化していえば、そんなに楽しくないことの方が多いかもしれない。もちろん、たくさんの人と音楽を作り上げる楽しみというのが別にあることは理解した上で言うのだが……。

だから、日本の太鼓音楽というのは、打楽器だけをメインにした、めずらしい演奏形態であり、これのもつ魅力は、太鼓をやる人間にとっては抗いがたいものと、あらためて再確認したことである。